



山村さん御一行NHK見学(54. 8.29)



マーシャル方面遺族会
(旧クェゼリン方面戦没者遺族会)
郵便番号 154
世田谷区野沢3-11-3
電話 東京(424)4300
振替口座東京0-93487 番
編集兼発行人 佐藤宗平

山村 要様のお手紙

拝啓 浮田様、奥様には毎日御元気でのごしのことと思
います。私達も浮田様始め皆様のおかげでみんなマジュロ島
に帰り着くことが出来ました。帰島早々早速お便りをしよう
と思いましたがそれも出来ず今日までになりました無礼をお
ゆるして下さい。

私達一同島に帰って来てから一回会食したとき日本で浮田
様はじめ会員一同様のま心のこもったお世話になった事々を
話して皆なみだをながしたり、なつかしがたりして半夜を
すごしました。

おかげさまでかえって来たグループは皆こんども日本へ行
きたいと云っています。行かなかった人達も今になって、が
っかりしたり残念がったりしています。それで来年も行くよ
うな話を居ます。私も出来るようでしたら毎年そちらに
行って皆様にあたり、我帝国のはってんをじかに見て又は
少年時代長くすんだことのある長崎の山河を見たいと思っ
ています。そして靖国神社にもおまいりして、皇居をも拝し
てなつかしい我故郷の空気を思う存分すつてきたいと思っ
ています。

そちらにたいがい中いつも感じますのはまわりが皆同胞で
同じ民族であるのがなんともいえないやすらぎを思います。
私はいま一つ気になっていることがあります。其は子供に
たいする教育です。私は戦前の教育が正しいと思っていま
す。それは教育に関する勸語のことです。私はそれを毎日よ
んでも読みあきないほど気のすくようなみおしえでした。こ
んなよいおしえは、どこへいっても見られないのです。私は
今もそれをこの上もないありがたいおしえと信じています。
外にもっとも書きたいことがたくさんありますがこの
次にします。私は帰る早々日夜いそがしいのです。今日は米
国の定休日を利用してこの手紙をかくことが出来ました。今
会議で毎日いそがしいのです。又あえるようおたがいきを付
けましょう。

浮田様御夫妻の御けんこうをいのります。

一九七九年十月七日

山村 要

浮田信家殿

目次

| | |
|-----------------------|----|
| 山村 要様のお手紙 | 1 |
| マーシャル諸島からの訪日団を迎えて | |
|会長 浮田 信家 | 2 |
| 南のお客様をお迎えして | |
|東京 佃 喜美 | 4 |
|長野 伊藤ますの | 4 |
|東京 田中 猛 | 5 |
|栃木 菊地 彦亘 | 5 |
|東京 小泉 文江 | 5 |
|東京 国松ふみ江 | 5 |
|東京 木下 満子 | 5 |
|東京 荒木 常子 | 6 |
|東京 井上 庸子 | 7 |
| ルオットとマロエラップと | |
| ——二五二空の戦闘(二) | |
|京都 平林 和夫 | 8 |
| 戦地からの便り | |
|東京 橋口 昭利 | 9 |
| 千鳥ヶ淵戦没者墓苑について | 10 |
| 昭和55年2月6日(水)の慰霊祭②靖国神社 | 11 |
| 直会旅行②館山寺温泉 | 11 |
| 寄付者芳名 | 11 |
| 事務局だより | 12 |
| 現地慰霊のお世話いたしました | |
| 戦史叢書が完成しました | |
| 戦死の場所などお知りになり | |
| たい方はいませんか | |
| 謹賀新年 | 12 |
| 戦記シリーズ | 35 |
| | 38 |

マーシャル諸島からの訪日団を迎えて

会長 浮田 信 家

一、はじめに

8月12日頃マーシャル諸島から日系島民42名が来日することは前号環礁で報じた。本会は12年前に戦地の跡を調査するため、現地に会員を派遣し、戦歿肉親の英霊を慰め、収骨し、治安や、対日感情の調査を行った。無謀の暴挙であったかもしれないが、無事目的を達し得たのは全く肉親英霊の加護とマーシャル、ギルバート、ナウル、オーシャン官民の心からの御協力のおかげと評し、些の過言ではない。其後たび重なる慰霊巡拝にいつもお世話下さった方々が来日されるのである。全員往復航空運賃支払済と聞き、我々は待受態勢を完了し8月を待った。

二、訪日団待ち受けの心構え

来訪の日系島民のお取扱につき、7月22日関係者集り細部に亘る打合せを行ったが、その中

- (1) 歓迎、接遇の主体は個人か本会か
- (2) 仮りに本会が主体となった場合経費支出限度はどうするか。

△費用。成田送迎者交通費、みやげ代、クェゼリン墓地供花費、歓迎迎パティー代等

△限度額10万円、15万円、20万円

(3) その他の御意見

については役員会に諮る必要があるのでは翌23日附書面を以て、全役員に尋ねた。結果は(1)主体は本会(2)費目は原案どおり、限度額は20万円が大多数(3)限度額は20万円以上を示唆された者二、三あった。何れとも明示ないものは総て会長一任であった。

三、第一陣の東京空港到着まで

7月31日(火) 山村要氏からコンチネンタルの都合でナウル航空に変更したが予定通り行くこと知らせを受けた。

8月7日(火) J t b (日本交通公社の略) グラム支社より、13日早朝成田空港着にて姓名不詳の30名のグループありとの通知があった。

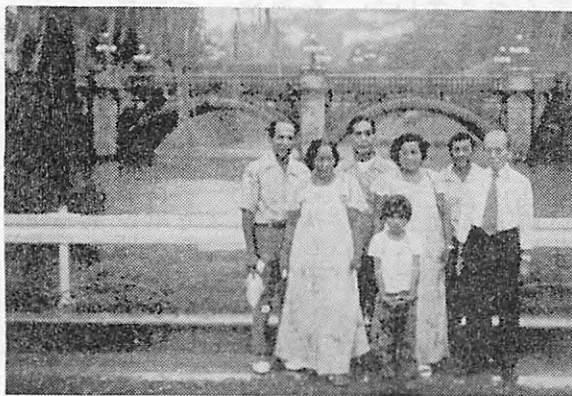
8月12日(日) 多少の不安はあったが浮田会長、佐藤副会長、J t b の西田氏は成田泊りの予定で空港に行く。念の為に到着者名簿を調べたら、その日午後8時山村氏外三名成田着のことが判ったのでこれを迎え、九段会館に案内し、差当りの日程を定めた。

四、九段会館の宿泊

九段会館は15日の追悼式参列者が泊るため14日以後3、4日は予約客で満員なので、12日に投宿の4名は14日午後から神保館ホテルに移った。

五、全国戦歿者追悼式に参列

8月15日(水) 今回来訪の日系島民は親日感特に篤く、お互い同志日本を今尚内地と呼ぶ人達であるが、滞日中たまたま行われる追悼式には参列の榮に浴し戦歿者の霊を慰め、かつ、かねて崇敬する天皇、皇后両陛下のお姿を拝みたいという熱烈な願があったので厚生省に願ひ出たところ、昭和46年と昭和48年政府主催の遺骨収集にも協力したこともあって特に代表の参列が許された。私は別の理由によって御招きを得ていたので山村要様とヨシミナシヨシ御夫妻の3人を連れ参列するを得た。幸にも両陛下の御座所に近く、終始拝めたので感激の余り涙を浮べた。



| 8月23日(木) | | 8月19日(日) | | 8月12日(日) | |
|--|--------|--|------------------------------------|--|----------------------------|
| 1945 東京 空港 着 | | 1145 鹿 児 島 空 港 着 | | 1945 東京 空 港 着 | |
| 到着した来日者 | 空港出迎者 | 到着した来日者 | 空港出迎者 | 到着した来日者 | 空港出迎者 |
| サブロー・ワセ アルパッタ・ジェモ レ トエジ・ジェモレ エミコ・キンノ ハナコ・ミヤゾエ 5人 | 浮田会長夫妻 | カーメン・ヤمامラ ノーマイ・ピーター チネ・シノザキ タマキ・ミヤゾエ リネ・ミヤゾエ 5人 | カナメ・ヤمام ラ 浮田会長 J t b 鈴木氏 | カナメ・ヤمامラ ヨシミ・ナシヨシ ジェテニル・ナシ ン ダビー・ナシヨシ 4人 | 浮田会長 佐藤副会長 J t b 西田氏 |
| 空港一東京間リムジンバス | | 東京一鹿児島間は全日空便 鹿児島空港より西鹿児島駅貸切バス 西鹿児島より博多まで鹿児島線 博多より東京まで国鉄(新幹線ひかり) | | 空港一東京間出迎者は西田氏自家用車で 来日者はリムジンバスで箱崎まで | |

終つて拙宅にお連れしたが話題は両陛下についてのみであった。

六、8月16・17日

8月16日(木) 山村氏は会員小早川氏の案内で富士山五合目までドライブ。ナシヨン一家は福島親戚へ旅行。8月17日(金) 朝から山村様、西田様、高林様の来部を乞い今後の行事を検討した。夜山村様に明18日ナウル航空で鹿児島着の一団あるを知る。電文に員数はないが一応18名と判断し、国鉄を利用し上京のこととし、旅行計画のことは西田氏にお願いした。

七、第二陣を鹿児島空港に迎える

8月18日(土) 早朝浮田会長、山村様、鈴木丁ト添乗員全日空にて羽田発鹿児島空港に飛び、正午ナウル航空で到着の5名を迎え博多で共に一泊。8月19日(日) 早朝新幹線で博多発、東京に向う。途中小郡、広島間植田様兄妹同車され歓迎をうけ午後2時東京到着。駅に会員多数の出迎をうけ、神保館ホテルに投宿。

八、更に第三陣を待ち三日間

8月20日(月) 午前休養。午後3時東京駅発の電車で熱海着。遠藤会員の出迎を受け小林旅館着。

8月21日(火) 訪日団員は続いて宿

8月22日(水) 泊、市中見物

同日浮田会長、高林幹事は成田空港に出迎えに行ったが到着者なく空振に終つた。

8月23日(木) 和瀬三郎氏より夕刻

成田到着予定の電報あり。浮田会長夫妻出迎えに行く。和瀬氏外4名到着したので九段会館に御案内した。

8月24日(金) 熱海逗留組(訪日団

9名、会員側12名・前夜会食)午前11時熱海発、午後1時東京到着。ナシヨン様一家も帰館し、漸く全員が九段会館に集合する。なおノーマイさんは群馬の兄上を訪ねられ二晩別行動だったがこの日帰京、一行に合流された。

九、靖国神社参拝

8月25日(土) 追悼式に参列許されなくても靖国神社と皇居遙拝だけは是非との熱望があったのでこの日はまず徒歩で同社に向つた。あれが大鳥居だ、あれが大村益次郎だと、さすが年輩の人の多いだけに懐しそうだ。やがて社務所に到着、松平宮司様に来意をお告げしたが、一同が昇殿参拝を了えて到着殿についたとき、宮司様は既に我々をお待ち下され、ご丁寧なご挨拶と本会とのつながりなど詳しくお話しされたので感激殊の外深く、神域で頂戴した御神酒、お守り、神饌、絵葉書など数々の御品を拝受し感激にあふれてお社を後にした。

十、皇居外苑東御苑拝観

神社から各自タクシーの乗り方を体験し皇居外苑和田倉休憩所着、保存協会の落合新司所長様から有難いご説明を承り、昼食後落合様の御案内で東御苑を隈なく拝観、ノーマイさんのため車椅子をおかし下さりそれをタブイ君

が押したり曳いたりの一駒もあつて楽しかった。

十一、皇居遙拝

東御苑をあとにし、大手門からお堀に添ひ桔梗門、坂下門の説明を加えながら二重橋前の広場に至り皇居遙拝。追悼式に参列できなかった人もやっと満足したらしく祝田橋、楠公銅像を遠望しつつ九段会館に帰つた。

十二、浅草観音、銀座通りの見物

8月26日(日) 日曜日なので荒木、木下両常任幹事、井上幹事夫妻が案内役となつて浅草、銀座その他それぞれのご希望を入れてショッピングに一日を有意義に使われた。

十三、NHKの見学

8月27日(月) 午前10時九段会館



| 9月13日(木) | | 9月7日(金) | | 8月31日(金) | |
|-----------------------|---|---|-------------------------------|--|-------------------------------|
| 0930 東京 空港 発 | | 0930 東京 空港 発 | | 0930 東京 空港 発 | |
| 出発した来日者 | 空港見送者 | 出発した来日者 | 空港見送者 | 出発した来日者 | 空港見送者 |
| カーメン・ヤマムラ カナメ・ヤマムラ | 浮田会長 片山幹事 山口良二氏 保田昌宏氏 箱崎まで送ったもの 佐藤副会長外数名 | サブロー・ワセ ヨシミ・ナシヨン ジュテニル・ナシヨ ン ダビー・ナシヨ ン | 浮田会長 箱崎まで送ったもの 佐藤副会長外数名 | ノーマイ・ピーター チネ・シノザキ タマキ・ミヤゾエ リネ・ミヤゾエ アルパッタ・ジュモレ トエジ・ジュモレ エミコ・キンノ ハナコ・ミヤゾエ | 浮田会長 箱崎まで送ったもの 佐藤副会長外数名 |
| 2人 | | 4人 | | 8人 | |
| 東京一空港間リムジンバス | | 東京一空港間リムジンバス | | 東京一空港間リムジンバス | |

発。NHK本社に行く。見学業務部次長森様自らカメラ撮影と一般見学コースのほか特別の人に限られる舞台裏の数々のご案内には深い感銘を受けた。

十四、毎日新聞本社見学

8月28日(火) 保田昌宏氏の斡旋により昭和史編纂部の御指示で見学コースの御案内とお話を伺い一同只驚嘆するのみであった。

十五、お訣れパーティー

8月28日(火) 歓迎とお訣れの二回を考えたパーティーも予定変更が多かったため両方を兼ねてこの日開催した。訪日団の方14名、本会側44名。夕方5時半会長の歓迎、送別をかねた挨拶につき訪日団々長和瀬三郎様(副団長山村要様通訳)の答辞、竹之下厚生事務官殿の音頭で乾盃、開宴。既に屢々お会いした方多く談笑の盛上りと共に、現地歌謡、日本の歌、手品などのたつのを忘れた。やがてお土産物の交換もにぎやかに行われ、予定の間もすぎ午後9時又の日をたのしみに閉会した。

十六、東京空港出発まで

全員夫々出発まで九段会館宿泊。
 8月29日(水) 帰国諸準備
 〃 30日(木) 帰国諸準備
 〃 31日(金) 8名出発
 9月7日(金) 4名出発
 9月13日(木) 2名出発
 出発毎に会長以下お見送りし、滞日中

の健康を祝い安全なる空路をお祈りした。訪日者の皆様からは今回本会から寄せられた厚情に対し万腔の謝意を表されるときに会員一同の健康と多幸を祈るとの伝言を残され出発された。

十七、故郷を探ね或は肉親を訪う

訪日の機会に故郷を探ね或は肉親に逢った方々は次のとおり。
 和瀬三郎氏(屋久島)、山村要氏(長崎・二宮)、ヨシミ・ナシヨ一家(福島)、ノーマイ・ピーター氏(群馬)

十八、訪日団の健康状況

鹿兒島から上京組が車内冷房のため毛布を借用しながら風邪をひいたこと、坂のない砂地有ちの団員にはコンクリートの九段坂はじめ日本の道にはひどく疲労したことなどあった。

タマキ様は左脚足首化膿のため28日山村、浮田付添い早朝受付開始の東京警察病院外科で受診のところ症状は、一カ月入院手術を要すとのこと、在京中通院して悪化を防ぐこととした。この外は無事故であった。

十九、むすび

終りに本会始めての本行事に対し、厚生省、靖国神社、日本遺族会、皇居外苑保存協会、日本放送協会、毎日新聞本社、日本交通公社川崎支店、神保館ホテルが特に寄せられた御協力と本会佐藤副会長はじめ会員が挙ってお援け下さったため、来訪者全員から衷心感謝裡に無事帰国された事を誌面を借り厚く御礼申し上げます。

南のお客様へ
お迎えして

佃 喜美

マジュロからのお客様を迎えてこんな事を感じました。九段会館で歓送迎会が開かれた時のことです。宴も終りに近く島の踊りを披露してください事になり暫くの仕度時間を置いて出て来られたのを見た時思わずアッと歓声をあげてしまいました。

この日この時のために新調されたというグリーンの入った赤い花柄の衣装、男性も同じ色柄の生地で作ったアロハを着用、女性は年令にふさわしく着替えフレアーを使ってそれぞれ個性に合ったデザインの服、貝の髪飾りやネックレスが良く似合っていて実に見事なものでした。何う所では今回の訪日に際し団体行動の時の目印にとこのようなお揃いの服を数種類作って来られたそうで感心させられました。

さて彼女達は踊りの輪をつくる為テープルを片寄せた部屋の中央に、手製のうちわを持ち、履物をぬいでさりとすわりました。彼女達はニコニコとまるでマジュロの海辺にいるようでした。かつて現地に行き歓迎を受けた時の情景がまさまじとよみがえって言葉は通じ難いけれど心と心の絆に結ばれた信頼と友情がこのような形で現わされたと思った時、涙がこぼれそうにな

りました。父の国、なつかしい日本、信頼できる国と、遠くより訪れて来てくださった皆様喜んで帰って頂けたらうかと心配です。

東京駅へのお出迎え、熱海での歓迎会、NHKの見学とほんの二、三回おつき合っただけでしたが、マジュロの方達の純粋さを痛感すると共に日本に対するイメージをあくまでも美しいものとして持ち帰ってほしいと願う心が最後の感激となり私にとつてあまりにも強い印象として残りました。

伊藤 ますの

島から他に出た事の無い人達がおいでに成られて会長さんはじめ役員の方々には一方ならぬ御苦勞が有りましたでしょうね。

昨年マジュロへ行きました時は大変御世話様になりましたから毎日でも行ってお世話をしたく思っ居りましたのに、八月三日から肋間神経痛に成り、諏訪に帰って居り熱海へ一回しか行けなくて大変残念でした。

熱海へ行きました時、言葉は通じませんが、山村さん、ノーマイさん、ヨシミさん、タマキさん、若い娘さん、皆さんが私の顔を覚えて居る、と手を固く握って下さいました。

役員さんのお話に依ると、電車の特急は苦手、地下鉄への階段、ホームそのものも脅威であったとか、馴れない為と思えました。それに何処へ行つて

も冷房が有り喉をやられ高価な薬を飲んで居られお気の毒でした。階段が不馴れの上、履き物も常とは違ふ為、夜は足が痛い、とノーマイさんはさすっでおいででした。日本の方達を信頼して来られて満足してお帰りに成りましたでしょうか。

熱海の宵 見忘れざりし

ノーマイさん 思わずしらす

手差しのおべり

島育ち 乗物すべてにたじくと

足さずおる 宿の夜

見交す笑顔の宴果てて 歌に 踊りに疲れきり 共に寝よと 言葉通

ぜず 床を叩く

今頃は マジュロの友は何処かと

見送り出来ぬはがゆさに

遠き長野で 涙 のみおる

日過ぎて マジュロの友の来日の

思い出に耽ける昨日今日

山村さん見送りの

夢みし今朝は秋晴れの空

田 中 猛

会長様はじめ役員の皆様方御苦勞様でした。またお世話様になりました。

マジュロのお客様とお会いした時、

私が昨年、彼地に墓参にまいりました時、夜の十一時頃現地に到着した時の

事が昨日の事のように目に浮かびました。その時、出迎えた山村様が、私の

手を握り「写真ありがとう」と言葉す

くなく御礼の言葉をいわれました。そ

の時私は涙のでる喜びを感じました。

今回、私は一部の方々に記念にと思

いまして、今年の四月頃伊豆方面で写

した美しい富士山の写真を差上げまし

たところ、山村様が「田中さん、富士

山はいつ頃良く見えるのですか」と聞

かれました。私は「東京の近くでは、

十二月頃より三月四月頃まででしたら

お天気の良い時、高い所からなら見え

ますね」とお話してあげました。その

時山村様は心残りある様子でした。

マジュロの皆さんは富士山を見る事

ができずに帰って行かれました。

菊地 彦 巨

八月二十八日 九段会館のパーティで、マジュロの山村様始め御一行と再会することが出来ました。当日は島の民謡と踊りの披露を受け、更にお土産まで戴き有難うございました。

思えば昨年夏御地を訪れた際、島を挙げての歓迎を受けたことを深く感謝しております。

この度の来日に当り御一行は同じ飛行機でなく、別々の便でしたので会長の御苦勞は並々ならぬものがあつたと推察致します。

観光地の選定等、当を得たものと思

いますが、唯今後を考慮するならば、

遺族会として、このような場合に費用

の負担を、ある一定の金額まで会長の

判断で処理出来るよう会則等で制定す

べきではないかと存じます。

小泉 文 江

この夏、マジュロの方々の訪日につきまして、あちらでの種々の行違ひのため会長様始め皆様は大変ご苦勞をなさいましたが、そのおかげ様で恙なく観光を終えてお国へお帰りになられました。本当に良かったと思ひました。

それにつきましても私は何一つお手

伝いも出来ませんでしたことをお詫び

申し上げます。皆様には何回もお迎えや

見送り、宿の配慮、見物、お買物へのお

付添い、熱海のお泊りのお世話、九段

会館での歓送迎会等の心からの細やかな

おもてなしに、お客様方はどんなに

喜んでいらつしやうしたことでしょう。

遺族会の現地墓参の際には、マジュ

ロの方々の親身も及びぬ程のお世話に

なり、その感謝のお気持で会長様や皆

様が暖かく接して下さいましたことが

有難く存じます。長い間お骨折りを

かけ致しまして厚く御礼申し上げます。

国 松 ふみ江

マジュロのお客様滞在中は、会長ご夫妻、副会長、役員の皆様の方ならぬお骨折りを頂き、ありがとうございます。

私は会社勤めの為、出迎えもできず

申し訳なく思っております。

九段会館のお別れパーティには参加

できて、山村様ご夫妻のほか大ぜいの

皆々様にお目にかかりました。

第一回現地墓参団に参加したときお

世話になった方々がおいでになつて、

とてもなつかしくまた嬉しく思いまし

た。

お客様は夫々よい想い出を持って無

事成田よりお帰りになりました。

役員の皆様には一方ならぬ御骨折

りを頂きありがとうございます。

木 下 満 子

三回に分かれて来日されたマジュロの皆さんがやっと揃い、翌日の八月二十五日から東京見物が始まりました。最初は靖国神社と皇居です。朝から何となく曇り空でした。足が弱いはな子さん、日本へ来てから足が痛くなったノーマイさんの二人はタクシーで私がお供し、あとの皆さんは会長さんと歩いて出発しました。

靖国神社の境内で、腰の曲つたおばあさんを見てマジュロの人達が口々に何かいっているのが尋ねたら、マジュロではあのような高齢なおばあさんは歩けないので大変珍らしいということでした。靖国神社では、立派な到着殿へ案内され昇殿参拝し、署名して神々しい気分浸られたことと思ひます。

外へ出たら薄日が差したので日頃の行いが良いから等と会長さんと話していたのですが、皇居へ向う途中からとうとう雨になりました。

皇居外苑でゆっくり休憩し、風邪気

味の人、足の弱い人を残してやや小雨の中を皇居東御苑へ落合様の案内で向いました。足の痛いノーマイさんの為に車椅子を貸して下さり、あの大きな身体ノーマイさんが乗ると何ともユーモラスで皆で大笑いしました。

桜の木はどれかとよく聞かれまして。やはり日本は桜と印象づけられていたのだなあと思いました。

雨に洗われた松や芝生の緑は一段と美しく皆でのおんびりのんびり歩きました。途中大雨になってもマジユロの方達は濡れるままなので会長さんも傘を差さずマジユロ流儀で行きました。そのあと二重橋を見物して無事一日目は終了しました。

今度日本へ行きたいという人には足を鍛えて行きなさいと話すといっていました。

幾日かマジユロの皆さんと毎日会っていると気が忙しい私ものんびりムードになってしまいました。

荒木常子

来日予定五〇人の、僅か三分の一に満たないお客様の数が我々を一寸気落ちさせたが、マジユロの方々は遂に日本にやって来た。

四年前、私が彼の地を訪れた時には想像だにしない事だった。いろいろの都合で三班に別れての来日、然も、日時にも予期せぬ事態が起って、会長御夫妻はじめ直接窓口になられた方々の

御苦労は並たいていの事ではなかったが、初めて、或いは何年かぶりの訪日に心踊らせたマジユロの方々もさぞいろいろの事に直面してとまどわれた事と思う。

九段会館に見覚えのある顔、顔、顔……をお迎えして、あの島民の方独特の体臭を身近に感じた時、あの島での感激が再び甦って来た。私達が島を訪れた時示して下さった島民の方々の好意だけでなく、それ以前に会長や佐竹さんが遺骨収集の為マーシャルに長期滞在中、親身も及ばぬお力添えを下さったと聞いており、島の方々に遺族の一員として御恩返しをする好機であり、又皆さんが、父や祖父の母国に少しでも良い印象を受けて帰って頂ける様、時間の許す限り努力したいと思つた。そしてそれがひいては亡き父や叔父達とその昔マーシャル滞在中、当時の島民の方々にお世話になったであろうその御恩返しにも繋がると思つた。

皆さんを御案内する為、あそこへもここへも計画は山程あったが、実際には、余り乗物や遠出に馴れておられぬ為、足が痛くなったり疲れたり結局は、武道館での戦死者追悼式、熱海、靖国神社―皇居、浅草観音―銀座、NHK、毎日新聞見学等予定の何分の一かで終ってしまつたが、それでもあの体格の良い体で、はきなれぬ靴をはき痛い足を我慢して歩いて居られ

る様子を見るにつけ、余り方々へお連れし過ぎたかしら、もつとゆつたりとした自由時間を多くとつた方が良かったかしらなどと反省の気持ちもしきりとするのである。

我々も心配していた事だったが、マジユロの方々も迷子にならぬ様にと揃いのドレスを四〜五組も用意して来て、外出の都度色を揃えて出かけるその周到さに感服させられた。タクシーで動けば簡単だが、色々な事を体験して頂く為にバスにも、地下鉄にも、エスカレーターにも乗って頂くようにした。

エスカレーターに乗りつけないので恐ろしくて腕にしがみついて来る方もあり、腕を組んで一緒に登りながら何か体温以外の暖かいものが通い合う様な思いで胸がジーンとなった。

お疲れの中、お別れパーティには、揃いのドレスで踊りや歌を披露して下さった。こちらも岡野幹事の手品などお見せしたが欲を言えども少し時間と準備のゆとりがあり相互の民謡や踊りの交換があったらもつとよかつただろうと思つた。

馴れぬ騒音の都会での生活で皆さんきつとくたくたにお疲れだったろうけれど今頃はそれも忘れて、楽しい想い出話を語り合つて居られるのだらうと勝手な想像もしている。日時、人数が最後まではつきりしなかつた事、お互いに初めての経験だった為、いろいろと

手違いやハラハラもさせられたが、今回の事を参考に又何時の日か此の様な機会があつた時に備えなければと思ふ。

マジユロの皆さんを浅草、銀座にお連れした日の一端を御紹介しましょう。

* * *

九段会館に約束の九時半にお迎えに出むく。マジユロのお客様の今日の御案内は、井上さん御夫妻と三人で勤める予定だったところへ木下さん保田さんも加わつて下さる事になった。雑踏に馴れないお客様を人ごみの中にお連れするには、マンツーマンとまで行かなくても一人でも多く御案内役がいた方が心丈夫である。

日本の下町の情緒、古い日本の建物、川を知らないという方々に東京の代表的な川である隅田川を、又都会の繁華街を見て頂くとうと欲張つて、今日は浅草の観音様から銀座の歩行者天国に御案内する事にした。

此の日、館林へ行かれるというノーマイさん、足のはれてしまったタマキさんとそのお姉さんのハナコさん、若いチネンさんが残り、十人が参加という事になった。タクシーで行けば簡単だが、いろいろ乗物も味わつて頂くという趣旨で、九段下の地下鉄から出発する事にした。切符も自動販売機に各自硬貨を入れて買つて貰う。お釣も出て来るので、七才のタビ―君など大い

に興味をそそられたらしい。

浅草に出て橋の上から大きな隅田川の流れを見物、名物の大提灯の下がる雷門をくぐって仲見世に入る。人ごみに馴れないので迷子になったら大変と、二三人に一人がピタリついて歩くが左右の店を珍しそうにのぞき歩いていると、ともすればはぐれそうになる。ついに四つ位のグループにバラバラになりハラハラさせられる。タビ君はお気に入り新幹線のおもちゃを買って貰い上気嫌。おまんじゅうの好きな山村さんは、人形焼の店でつい足が止まる。

水の中をクロールで泳ぐ河童のおもちゃにはつい顔もほころんで、くにお孫さんを買って行きたいのではないかと心中をおしはかるが、しかし一人が遅れると皆バラバラになってしまうので心を鬼にして歩を進める。仁王門の前でやっと全員顔を合わせて大休止。皆さん体格が良いせいかととも水を欲しがられるのだが水飲場が全然無い。折よくキャンデー屋が自転車を押していたのでアイスキャンデーを思い思い買つてのどをうるおした。

本堂の前の大きな香炉の前で、立昇る香の煙に手をかざしている人達を見てそのいわれを説明すると皆もそれぞれ煙を掌に受けて額や肩に当てている。山村さんの奥さんは腰が痛いからとしきりに煙にかざした手で腰をさすっていた。

本堂の前で腰をおろして休んでいる時、声の良いアルバタさんが軍歌や、当時の国民歌謡を小声で歌い出したので私達も声を合わせて「あの椰子の島」など一緒に口ずさんだ。近くに腰かけて休んでいた参詣の人々もオレンジ色のアロハで軍歌を口ずさむアルバタさんに暖かい好意のまなざしを送っていたのが嬉しかった。観音様にお詣りした山村さんは家内安全だろうか何かお札を買っていた様だった。

六区への道を歩き初めると、又々喉が渇いてしまったらしく半数の人が露店のラムネ屋の前でラムネを買って飲んでい。とに角、むし暑い八月の炎天下である。サンダルを売る店で靴をはき馴れない男の方達がそれぞれ買物、店の主人が「皆さん日本語がお上手ですな」とびびくりしている。雑沓の六区をはぐれぬ様小グループで互に連絡を密にして歩く。皆さんの希望もあつておそばを食べようと一生懸命探すが意外に店が無く、又たまにあつても休日の昼食時とあつては全員一度に入れる店は少く、仕方なく吉野屋のカウンターで今はやりの牛どんを頂く事になった。

好みは？と心配したがそれも無用で皆牛どんの上にせん切りの紅生姜をのせて箸を上手に使つておいしそうに食べて居られた。水もふんだんにお替りした事は勿論である。

そこから地下鉄の駅へ行く迄が、ト

イレ拝借の為途中のスーパーに入ったり、ダンゴ屋さんの店をのぞいたり、十分位の道を四十分も一時間もかけてゆっくり歩いた。

地下鉄銀座で下車して、歩行者天国で賑わう四丁目の交叉点に立って、日曜の繁華街も充分味わつて頂き、地下鉄の階段の昇降や乗替の労をばぶくつもりで日本橋までのんびり歩いた。高島屋デパートでは三十分程ショッピングも楽しんで、九段会館え薄暗くなる頃戻つたが、皆さん顔には出されなかつたがかなり疲れていらしたのではないか、あれも、これも見て頂き度いという好意が逆に有難迷惑に終つてしまった。

井上庸子

八月十九日、暑い日中、東京駅の新幹線のホームにマーシャル方面遺族会の方々が一人また一人集つて来られました。

今日は、英霊の眠るマーシャル諸島の一つ、マジュロ島のお客様の来日二組目の方々をお迎えする日です。五年前に、主人が墓参のため現地に立寄りお世話になった方々にお目にかかれる

を今か今かと待つ事三十分、新幹線がホームにすべる様に入つて来ました。すでに車内の乗客は荷物を持ち通路を出口へ向っています。その中で、ニコニコと手を振りゆつたりと座席に座つ

たマジュロの方々を発見、何となくユーモラスで、これからまた出発する様な錯覚をおこしそうでした。

写真でおなじみの、もの静かな山村さん、はずかしそうな夫人、ポリニーム万点の大きなノーマイさん、スペイン系の様なタマキさんなど、そして一番後からキビキビした浮田会長が下車されました。会長は御高齢にもめげずこの暑さの中を鹿児島まで、お出迎えに行つて下さいました。ただただ頭が下る思いです。

その後、色々の形でマジュロの方と接し、すっかり現地、のんびり、ゆつたりとしたマジュロタイムに乗せられた反面、現代の私達の忘れていた、素朴な心や純情ともいえる山村夫人の所作など、目をつぶると、ヤッコイ（今日は）コンモールターダ（ありがとうございます）と独得のいい廻しの日焼したニコニコ顔が浮んで来ます。日常生活のいそがしさと時間に追われている様な私には何かほつとしたものが感じられ、羨ましいものがあります。英霊の眠るマーシャルの地はその様な方々に守られ、日本から遠く海で隔てられていても心なぐさめられる様な気がします。

在日中の生活が少しでもマジュロの方々にとって良き思出になれば……と今またあらためて写真を見ながら思いつくまま書きました。

ルオットとマロエラップと (二)

—二五二空の戦闘を中心として—

平 林 和 夫

(一) ルオットからマロエラップへ
 マーシャル諸島ルオット島。それは
 ケゼリン環礁の中にあるさんご礁の
 小島であつて、ここに第二十二航空隊
 司令部(司令官海軍少将吉良俊一、の
 ち中将)がおかれていた。

そのころの内南洋方面は、ラバウル
 よりも概して更に静穏であつた。わが
 二五二空はこのルオットに本隊をお
 き、派遣隊をウエーキ、マロエラップ、
 ナウル島において、哨戒索敵と共に整
 備訓練に重点がおかれていた。二五二
 空本部は、戦闘指揮所の階下におかれ
 (階上は二十二航戦司令部) 副官部、
 給与などの業務にあてられていた。

私共も次第に実務がわかつて元気に
 服務した。バレーやテニスをするこ
 もあり、海軍記念日には模擬店をする
 ような余裕もあつた。五月の異動で、
 主計科も庶務主任 山田和雄 主計中尉
 (のち戦死主計少佐) 同期の二名も転
 勤し私が庶務主任後任となつた。

いよいよ本番としての庶務主任で、
 これまでのいわば「見習」のように司
 令以下の士官も、部下の兵も、なれて
 いたので心強かつた。まだ同時期この
 方面は、準内地的であつて、敵の来襲
 はなかつた。

ところがこうした間にあつて、戦雲
 は次第に中部太平洋方面に、音もなく
 近づいてきたのだ。ガダルカナルから
 ラバウルにかけての大方の戦局的見通
 しは、敵側の陽動作戦の影響すること
 であつて、実際は中部太平洋方面が、
 敵の正面攻撃路となつてきたのであ
 る。即ち敵は十一月タラワ・マキン島
 に上陸を開始し、ついにその二十六日
 タラワ・マキン玉砕、つづいていわゆ
 るギルバード諸島沖航空戦(第一次、
 第四次)ならびにマーシャル諸島沖航
 空戦がおこり、この一連の戦いの戦果
 に対して、十二月六日ご嘉尚の勅語が
 聯合艦隊長官に賜り、同長官は七日こ
 れを全軍に布告した。

これらの連日の戦いには、ルオット
 から二五二空のゼロ戦はじめ、七五二
 空の陸攻などが連日勇ましく飛びた
 ち、その都度「全員見送りの位置につ
 け」が令されるなど、緊迫のうちにま
 たたく日数を経過した。戦果も大きか
 かつたが、その影に、帰らぬ機も少くな
 かつた。

それから同年十二月、二五二空は再
 び同じマーシャルのマロエラップ島に
 前進南下したのである。それは哨戒索
 敵の要地としての戦路上の立場と、戦

闘機隊としての配備兵力上の目的から
 であつた。主計長は武井治主計大尉
 (のち主計少佐) に交代していた。

四 基地破壊

二五二空本隊が転進したマロエラッ
 プ島は、同名の環礁の中にあり、長径
 約五二K、短径約二四K、約五〇ケの
 小島が甘藷形につらなる環礁で、その
 内最も大きなタロア島に、かすかす十
 字の滑走路がつくられ、ここに二五二
 空の主力約九〇〇名、六十三警備隊約
 一一〇〇名、七五五空派遣隊約五〇
 名、五五二空派遣隊約二〇〇名、七五二
 空派遣隊約二〇〇名、第四海軍施設部マ
 ロエラップ派遣隊約五五〇名、第十六
 海軍々用郵便所派遣員四名、第四海軍
 軍需部派遣員約二五名、一〇四航空廠
 タロア分工場一二〇名、横須賀海軍工
 廠派遣員八名、それに陸軍の海上機動
 第一旅団の佐藤隊約二一〇名、同じく
 中西隊約二〇〇名その他合計約三三〇
 〇名がいた。六十三警備隊司令は海軍
 大佐鎌田正一(のち少将) 主計長は平
 田好蔵主計大尉(のち主計少佐) であ
 つた。

それまでに、敵の来襲機は逐次回数
 と機数を増し、やがて戦爆連合の来襲
 となり、夜間来襲も加わり、戦況は次
 第に急を告げはじめていた。一月二十
 六日主計長武井主計大尉は内地に出張
 離島し、私が主計長代理になつた。

忘れもしない十九年一月三十日、未
 明から早朝にかけて、ついに敵の大挙

来襲となつたのである。マロエラッ
 プ島の他ルオット、ケゼリン、ウオッセ、
 ミレ、ヤルト、エニウエトックに、
 大機動部隊の来襲があり、午後には艦
 砲射撃も加わり、終日終夜熾むところ
 がなかつた。来襲機数延四〇〇機、計
 十三隻の巡洋艦駆逐艦が視認された。

爆撃と銃撃と砲撃とそれは間断息つ
 く間もなき、すさまじい来襲ぶりであ
 つた。所在航空隊は一瞬にして壊滅し
 滑走路と建造物は尽く被弾破壊し、島
 は全くの廃墟と化したかに見えた。そ
 の中を、私共は敵上陸に備えねばなら
 なかつた。私達はその緊急の用意をし
 た。機密書類と詔勅を処分し、全力を
 ふるって戦闘配食をした。すべての焼
 却を終つたあと、経理学校で学んだ通
 りに司令部に「機密書類処分宜し」の報
 告に本部に行った。あすの玉砕に対し
 なし得る限りの手だてを十分そなえた
 ととき、何というさっぱりした気分か
 と、心中ひそかに肉身への決別を告げ
 ると共に、清潔な爽やかさに一種の満
 足が感じられた。

それからの日々、毎日全島全員が全
 力を挙げて、滑走路の修復を急いだ。
 やられてもやられても、夜のうちに大
 きな穴の埋立を急いだ。敵の来襲は激
 しかったが、上陸はして来なかつたの
 である。(以下次号)

(元二五二空主計長、海軍主計大尉
 現京都府久美浜小学校長、54・2・
 20記)

戦地からの便り

橋口 昭利

今般々環礁の編集企画として、戦地からの便り等の掲載について御依頼を受けました。幸に兄が昭和18年7月にクエゼリン島エビゼに着任以来両親への手紙が、戦災にあったにも拘らず無事保存されていましたので、この企画に御こたえすること致しました。

内容は私事も多く、お見苦しい点もあるかと思いますが、戦地での当時の様子も偲ばれ、会員の皆様の御回想に、或は当時の僅か6ヶ月間の現地での情況変化を想像する資料にお役に立



便箋一杯の南洋風景

ちましたら幸に存じます。

(発信者、橋口兼貞 大正8年生、海兵68期卒 クエゼリン島エビゼにて玉砕、水上偵察分隊長、当時海軍大尉 27歳)

(第2信 昭18・8・8)

御無沙汰致しました、酷暑の候皆々様御元氣ですか、私も着任以来至極元氣に勤務致して居ります。分隊長として百名以上の部下を持ち責任の重大さを痛感致して居ります。然し部下は皆元氣よく上の命令を守り仕事をやってくれますので、私も心から彼等を信じ共に困苦欠乏に耐へ共に楽しみ愉快に毎日を送って居ります。

略

私の居る処は主として哨戒及船団の護衛が任務で眼に見えざる敵と毎日戦って居ります。実に忍耐を要する仕事ですが皆よく張切ってやってくれます。経度の関係で朝三時過ぎに日が昇り四時には日が落ちます。毎日二時半に起きて飛び出します。最初の間は変に感じましたがもう馴れてしまいました。島は小さく周囲は太平洋で、見渡す限り海又海です。日は水平線から昇り又水平線に没して行きます。島には椰子の木がたくさん生えて居ります。如何にも南に來たという感じが致します。

南洋特有のスコールが毎日の様に來て猛然と島をあらって行きます。長いスコールで三十分位のものですが、ものすごい雨で夕立等比較になりません。飛行機を出して居る時が一番心配です。しかし之れがありますので井戸がなくても充分です。スコールの後は実に涼しく東京の暑さよりも涼しいかも知れません。略

出発にあたっての御薫陶肝に銘じて居ります。私の信念としてあく迄がんばりますが、人間特に武人は死の時機を選ぶことが大切だと思つて居ります。早やまっても遅れても不忠になります。然し私も此の点は自分ではわかつて居る様に思ひます。又日夜此の点の修養に心懸けて居りますから御安心下さい。

(第5信 昭18・12・2)

戦争は愈本格的に入り、敵も又必死です。然し負けてはならぬ此の一戦、石にかざりついても勝たねばなりません。皆様も是非御奮闘を願います。私も勿論家を出る時に生還を期して居りません。大いに奮闘して父さんや兄さんの分もやるつもりで居ります。略

略

戦地もいよいよ戦は激烈となりつつあります。米英の物質文明に我々は東洋の精神力で戦つて居ります。しかしやつつけてもやつつけても大量の船舶飛行機人員をもつて来る。彼等に対してはある程度の量を備えて居る必要がありますが敵は吾々を馬鹿にしてあとからあとからとやつて來ます。然し少しも心配することはありません。吾々は一生懸命に現在の線を保つて居ります。此の間に内地で充分戦力を増強し、敵が相等消耗した処を一挙にたたきのめしてやる必要があります。私も至極元氣で敵弾の中を飛び廻つて居ります。

兄さんも工場の方に落つき益々御勉強の由、どしどし軍需品の製作に當つて下さい。

敏子もお花だ、お茶だ等と言つていられなくなつたでしょう。家の手伝いをしっかりやつて女中の代りに働きなさい。昭利の兵学校の受験の成果は如

何でしたか、勿論無事に入れた事と信じて居ります。——略——

正夫ものらくらしている時ではないでしょう。一つ腹をきめて物事にあたると希望します。

春子、昭夫それぞれ一生懸命勉強しなさい。——略——

(第8信 昭19・1・20 ご両親様 外御一同様宛——絶筆

新年御目出度う御座います。——略——
基地は何時正月が来たのかわからなかった様な有様です。暑さは内地の夏と変らぬし、全然正月らしい気分もせず平常と変らず朝から哨戒飛行を行っていました。——略——
決戦の昭和十九年を迎え大いに張切ってやって行こうと思つて居ります。此の基地を死守し、あく迄頑張つてやるつもりです。私には唯進撃あるのみ、一切後方基地はあてにして居りません。最近空襲のあいまに陣地を強化し愈死守の態勢を備えつつあります。多忙な毎日ですが空襲下に映画を実施する等まだまだ余裕は持つて居ります。——略——

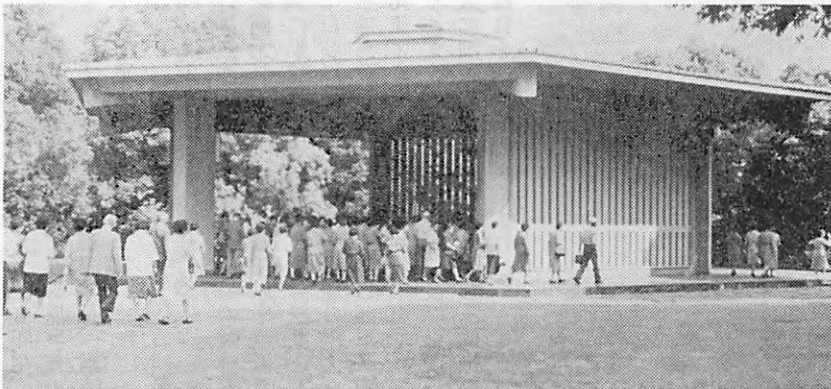
父上はじめ皆々様愈御多忙と思いません。学校に行つて居るものは益々勉強して早く立派な国民になる様希望して居ります。

皆々様の御健康を祈ると共に御健康閣下さらんことを願います。私も一層馬力をかけてがんばります。 草々

千鳥ヶ淵戦没者墓苑について

「戦没者のお墓を国営で」との要望によって現在の千鳥ヶ淵戦没者墓苑が完成したのは、昭和三十四年三月でありました。

墓苑中央地下室の納骨堂には、数次



お彼岸のお詣り

納骨一覽表 (54. 5. 26現在)

| 地下室 | 下別 | 地域別 | 納骨数 | 戦歿者数 |
|-----|----|--|---------|-----------|
| 第1室 | | 北本 土 及 辺 周 辺 沖 繩 硫 黄 島 | 8,952 | 239,900 |
| 第2室 | | 中 (旧 満 洲 国) | 37,449 | 46,700 |
| 第3室 | | 中 (除 台 朝 満 洲 国 湾 鮮) | 38,886 | 521,300 |
| 第4室 | | フィリッピン | 84,726 | 498,600 |
| 第5室 | | マレーシア ベトナム | 8,291 | 64,000 |
| | | ビルマ タイ 印 | 35,522 | 166,900 |
| 第6室 | | 中 部 太 平 洋 ニ ユー ギ ン ア 島 諸 島 ソロモモン | 94,060 | 530,900 |
| | | ソ 連 本 土 | 37 | 52,700 |
| 合 計 | | | 307,923 | 2,121,000 |

政府派遣団のほか本会始め各団体や個人が外地から持帰った御遺骨が安置され、両陛下、皇太子・同妃殿下はじめ皇族方、一般団体、個人がお詣りされております。
納骨された御遺骨は、氏名の判らない軍人、軍属のほか戦闘に参加した民間人のもも含まれており、所謂「国営の無名戦死の墓」です。宗教宗派の關係で靖国神社に参拝されない方も、沢山お詣りされます。
墓苑の中程六角堂に茶褐色の大きな陶棺があります。今次大戦の主な戦場から収集した小石を粉碎し焼きあげた

もので重量は五トンとのことです。中には御下賜の金銅製の壺に各戦場の象徴的遺骨が納められております。
現在の納骨数は別表の通りで、本会關係は第六室(正面に対し左側手前)に納められています。
場所は、千代田区三番町二番地で、敷地面積一万六千㎡(五千坪)、都心にあると思えない静寂、清浄な所です。靖国神社からは歩いて十分程の所ですから、神社に参拝の折などには墓苑にもお詣りされますよう、お奨めいたします。
尚、千鳥ヶ淵戦没者墓苑は本会と特に深い關係があります。『環礁』11号(45・1・1発行)同17号(48・1・1)を御覧下さい。

昭和五十五年二月六日(水)

慰霊祭 六日 靖国神社

直会旅行 六日・七日 奥浜名湖の御案内

明けましておめでとう御座います。

恒例の二月六日の行事について御案内申し上げます。

◎慰霊祭と定期総会

午前九時 受付開始、午前十時 慰霊祭、午前十一時 定期総会
II 靖国神社

◎九段会館に宿泊を希望される方は、宿泊月日、氏名、性別、年齢を書いて、一月十日迄に料金を添えお申込み下さい。宿泊料は、一泊二食付で、四、二〇〇円です。

◎直会旅行会(六日・七日)

乗物 往復共大型観光バス、行先 奥浜名湖
宿泊 奥浜名湖ホテル

電話(〇五三三二)六〇七八一一

費用 小学生以上 一五、〇〇〇円(六日の昼食代、バス代、宿泊代、七日の昼食代、拝観料記念写真代共)

申込 一月十日迄に、氏名、住所、性別、年齢を記入し、料金を添えてお申込下さい。申込順に受け付けて、一月十日又はその前でも、一〇〇名に達した時締切ります。

◎コース 二月六日(水) 慰霊祭、総会が終り次第(正午頃の見込)バスは昼食弁当、お茶、果物等を積みこんで靖国神社を出発します

行先は、昨年伊豆に行った時希望の多かった浜名湖畔の館山寺温泉です。首都高速、東名高速を一路西へ。三ヶ日インターで一般道路に降り、館山寺の「フラワーパーク」に着きます。ここには観賞用の大温室三棟のほか、原種ツツジ園、バラ園、日本庭園などがあります。ホテル着を午後五時と予定しています。

翌二月七日(木) 附近散策の後、バスは名勝竜潭寺(りょうたんじ)に向います。ここは井伊家発祥の地井伊谷にあり、庭園は小堀遠州の作庭で名園との定評があります。本堂内の彫刻は名工左甚五郎作と伝えられています。

次は奥山の方広寺(ほうこうじ)です。白崖峰という巨岩に五百羅漢の石仏が見られ、一山の堂塔塔藍は三十余り、中でも半僧坊権現祠はその造り、細工の点で見ごたえがあります。

ここで昼食をとりませう。ピーベリーを予定しております。

一時頃方広寺出発、三ヶ日インターから東名高速に入り、一路東上し東京駅着は午後五時半頃。九段会館までまいります。

〔注〕目次に館山寺とあるのは印刷途中で奥浜名湖に変更しました。

(世話人 荒木・岡野)

寄付者芳名

(六一名)

本欄に掲載の会員各位は、年度会費御完納の上の御寄付であり、本会運営上寄与するところ多く役員一同いつも感謝申し上げます。諸物価の上昇によつて本会の会費は一昨53年から年額二千元となりました。本部では一層節約を旨とし本務遂行に事欠かぬよう留意いたしますので今後共御協力いただき度御礼と共に御願ひ申し上げます。(昭和54年6月1日から昭和54年10月31日までに入金の方)

寄付額 芳名(敬称略)

名簿委員会その他

一〇〇〇〇 中島新之丞殿
五〇〇〇 井上 義夫殿
八〇〇〇 長谷川栄次殿
七〇〇〇 村岡 達志殿
五〇〇〇 珊瑚 会殿
二〇〇〇 進藤 進殿

一〇〇〇〇 兄 田村賢治郎
一〇〇〇〇 妻 渋谷セキノ
一〇〇〇〇 兄 浮田 信家
一〇〇〇〇 妻 佐竹 エス
八〇〇〇 母 加藤きくや
七〇〇〇 妻 鈴木つな子
五〇〇〇 母 吉田 いそ
二〇〇〇 妻 柏木 春江
一〇〇〇 母 助川与富子

一〇〇〇〇 兄 池田 精治
四〇〇〇 弟 藤木 ハナ
一〇〇〇〇 妻 黒川 一
一〇〇〇〇 甥 望月とよ子
五〇〇〇 妻 志田 かね
一〇〇〇〇 母 神田八千代

一〇〇〇〇 妻 新田富美子
一〇〇〇〇 父 加藤 源治
一〇〇〇〇 妻 石幡サツキ
二〇〇〇〇 妻 吉田 ハル
四〇〇〇〇 妻 竹林 高男

一〇〇〇〇 兄 新後閑 彰
二〇〇〇〇 父 滝沢謙次郎
一〇〇〇〇 妹 福田 とよ
一〇〇〇〇 弟 土岐 達雄

一〇〇〇〇 兄 浮田 信家
一〇〇〇〇 妻 佐竹 エス
八〇〇〇 母 加藤きくや
七〇〇〇 妻 鈴木つな子
五〇〇〇 母 吉田 いそ
二〇〇〇 妻 柏木 春江
一〇〇〇 母 助川与富子

一〇〇〇〇 兄 田村賢治郎
一〇〇〇〇 妻 渋谷セキノ
一〇〇〇〇 兄 浮田 信家
一〇〇〇〇 妻 佐竹 エス
八〇〇〇 母 加藤きくや
七〇〇〇 妻 鈴木つな子
五〇〇〇 母 吉田 いそ
二〇〇〇 妻 柏木 春江
一〇〇〇 母 助川与富子

一〇〇〇〇 兄 池田 精治
四〇〇〇 弟 藤木 ハナ
一〇〇〇〇 妻 黒川 一
一〇〇〇〇 甥 望月とよ子
五〇〇〇 妻 志田 かね
一〇〇〇〇 母 神田八千代

一〇〇〇〇 妻 新田富美子
一〇〇〇〇 父 加藤 源治
一〇〇〇〇 妻 石幡サツキ
二〇〇〇〇 妻 吉田 ハル
四〇〇〇〇 妻 竹林 高男

一〇〇〇〇 兄 新後閑 彰
二〇〇〇〇 父 滝沢謙次郎
一〇〇〇〇 妹 福田 とよ
一〇〇〇〇 弟 土岐 達雄

一〇〇〇〇 兄 浮田 信家
一〇〇〇〇 妻 佐竹 エス
八〇〇〇 母 加藤きくや
七〇〇〇 妻 鈴木つな子
五〇〇〇 母 吉田 いそ
二〇〇〇 妻 柏木 春江
一〇〇〇 母 助川与富子

一〇〇〇〇 兄 田村賢治郎
一〇〇〇〇 妻 渋谷セキノ
一〇〇〇〇 兄 浮田 信家
一〇〇〇〇 妻 佐竹 エス
八〇〇〇 母 加藤きくや
七〇〇〇 妻 鈴木つな子
五〇〇〇 母 吉田 いそ
二〇〇〇 妻 柏木 春江
一〇〇〇 母 助川与富子

一〇〇〇〇 兄 池田 精治
四〇〇〇 弟 藤木 ハナ
一〇〇〇〇 妻 黒川 一
一〇〇〇〇 甥 望月とよ子
五〇〇〇 妻 志田 かね
一〇〇〇〇 母 神田八千代

一〇〇〇〇 妻 新田富美子
一〇〇〇〇 父 加藤 源治
一〇〇〇〇 妻 石幡サツキ
二〇〇〇〇 妻 吉田 ハル
四〇〇〇〇 妻 竹林 高男

一〇〇〇〇 兄 新後閑 彰
二〇〇〇〇 父 滝沢謙次郎
一〇〇〇〇 妹 福田 とよ
一〇〇〇〇 弟 土岐 達雄

一〇〇〇〇 兄 浮田 信家
一〇〇〇〇 妻 佐竹 エス
八〇〇〇 母 加藤きくや
七〇〇〇 妻 鈴木つな子
五〇〇〇 母 吉田 いそ
二〇〇〇 妻 柏木 春江
一〇〇〇 母 助川与富子

一〇〇〇〇 兄 田村賢治郎
一〇〇〇〇 妻 渋谷セキノ
一〇〇〇〇 兄 浮田 信家
一〇〇〇〇 妻 佐竹 エス
八〇〇〇 母 加藤きくや
七〇〇〇 妻 鈴木つな子
五〇〇〇 母 吉田 いそ
二〇〇〇 妻 柏木 春江
一〇〇〇 母 助川与富子

一〇〇〇〇 兄 池田 精治
四〇〇〇 弟 藤木 ハナ
一〇〇〇〇 妻 黒川 一
一〇〇〇〇 甥 望月とよ子
五〇〇〇 妻 志田 かね
一〇〇〇〇 母 神田八千代

一〇〇〇〇 妻 新田富美子
一〇〇〇〇 父 加藤 源治
一〇〇〇〇 妻 石幡サツキ
二〇〇〇〇 妻 吉田 ハル
四〇〇〇〇 妻 竹林 高男

一〇〇〇〇 兄 新後閑 彰
二〇〇〇〇 父 滝沢謙次郎
一〇〇〇〇 妹 福田 とよ
一〇〇〇〇 弟 土岐 達雄

一〇〇〇〇 兄 浮田 信家
一〇〇〇〇 妻 佐竹 エス
八〇〇〇 母 加藤きくや
七〇〇〇 妻 鈴木つな子
五〇〇〇 母 吉田 いそ
二〇〇〇 妻 柏木 春江
一〇〇〇 母 助川与富子

一〇〇〇〇 兄 田村賢治郎
一〇〇〇〇 妻 渋谷セキノ
一〇〇〇〇 兄 浮田 信家
一〇〇〇〇 妻 佐竹 エス
八〇〇〇 母 加藤きくや
七〇〇〇 妻 鈴木つな子
五〇〇〇 母 吉田 いそ
二〇〇〇 妻 柏木 春江
一〇〇〇 母 助川与富子

一〇〇〇〇 兄 池田 精治
四〇〇〇 弟 藤木 ハナ
一〇〇〇〇 妻 黒川 一
一〇〇〇〇 甥 望月とよ子
五〇〇〇 妻 志田 かね
一〇〇〇〇 母 神田八千代

五〇〇〇〇 母 川本ユキエ
一〇〇〇〇 姉 中野フヂエ
五〇〇〇 妹 井上 照美
五〇〇〇 妻 園山 和子
八〇〇〇 弟 薬師寺理助
五〇〇〇 妻 内富みつゑ

一〇〇〇〇 兄 浮田 信家
一〇〇〇〇 妻 佐竹 エス
八〇〇〇 母 加藤きくや
七〇〇〇 妻 鈴木つな子
五〇〇〇 母 吉田 いそ
二〇〇〇 妻 柏木 春江
一〇〇〇 母 助川与富子

一〇〇〇〇 兄 田村賢治郎
一〇〇〇〇 妻 渋谷セキノ
一〇〇〇〇 兄 浮田 信家
一〇〇〇〇 妻 佐竹 エス
八〇〇〇 母 加藤きくや
七〇〇〇 妻 鈴木つな子
五〇〇〇 母 吉田 いそ
二〇〇〇 妻 柏木 春江
一〇〇〇 母 助川与富子

一〇〇〇〇 兄 池田 精治
四〇〇〇 弟 藤木 ハナ
一〇〇〇〇 妻 黒川 一
一〇〇〇〇 甥 望月とよ子
五〇〇〇 妻 志田 かね
一〇〇〇〇 母 神田八千代

一〇〇〇〇 妻 新田富美子
一〇〇〇〇 父 加藤 源治
一〇〇〇〇 妻 石幡サツキ
二〇〇〇〇 妻 吉田 ハル
四〇〇〇〇 妻 竹林 高男

一〇〇〇〇 兄 新後閑 彰
二〇〇〇〇 父 滝沢謙次郎
一〇〇〇〇 妹 福田 とよ
一〇〇〇〇 弟 土岐 達雄

一〇〇〇〇 兄 浮田 信家
一〇〇〇〇 妻 佐竹 エス
八〇〇〇 母 加藤きくや
七〇〇〇 妻 鈴木つな子
五〇〇〇 母 吉田 いそ
二〇〇〇 妻 柏木 春江
一〇〇〇 母 助川与富子

一〇〇〇〇 兄 田村賢治郎
一〇〇〇〇 妻 渋谷セキノ
一〇〇〇〇 兄 浮田 信家
一〇〇〇〇 妻 佐竹 エス
八〇〇〇 母 加藤きくや
七〇〇〇 妻 鈴木つな子
五〇〇〇 母 吉田 いそ
二〇〇〇 妻 柏木 春江
一〇〇〇 母 助川与富子

一〇〇〇〇 兄 池田 精治
四〇〇〇 弟 藤木 ハナ
一〇〇〇〇 妻 黒川 一
一〇〇〇〇 甥 望月とよ子
五〇〇〇 妻 志田 かね
一〇〇〇〇 母 神田八千代

一〇〇〇〇 妻 新田富美子
一〇〇〇〇 父 加藤 源治
一〇〇〇〇 妻 石幡サツキ
二〇〇〇〇 妻 吉田 ハル
四〇〇〇〇 妻 竹林 高男

一〇〇〇〇 兄 新後閑 彰
二〇〇〇〇 父 滝沢謙次郎
一〇〇〇〇 妹 福田 とよ
一〇〇〇〇 弟 土岐 達雄

一〇〇〇〇 兄 浮田 信家
一〇〇〇〇 妻 佐竹 エス
八〇〇〇 母 加藤きくや
七〇〇〇 妻 鈴木つな子
五〇〇〇 母 吉田 いそ
二〇〇〇 妻 柏木 春江
一〇〇〇 母 助川与富子

一〇〇〇〇 兄 田村賢治郎
一〇〇〇〇 妻 渋谷セキノ
一〇〇〇〇 兄 浮田 信家
一〇〇〇〇 妻 佐竹 エス
八〇〇〇 母 加藤きくや
七〇〇〇 妻 鈴木つな子
五〇〇〇 母 吉田 いそ
二〇〇〇 妻 柏木 春江
一〇〇〇 母 助川与富子

一〇〇〇〇 兄 池田 精治
四〇〇〇 弟 藤木 ハナ
一〇〇〇〇 妻 黒川 一
一〇〇〇〇 甥 望月とよ子
五〇〇〇 妻 志田 かね
一〇〇〇〇 母 神田八千代

一〇〇〇〇 妻 新田富美子
一〇〇〇〇 父 加藤 源治
一〇〇〇〇 妻 石幡サツキ
二〇〇〇〇 妻 吉田 ハル
四〇〇〇〇 妻 竹林 高男

一〇〇〇〇 兄 新後閑 彰
二〇〇〇〇 父 滝沢謙次郎
一〇〇〇〇 妹 福田 とよ
一〇〇〇〇 弟 土岐 達雄

一〇〇〇〇 兄 浮田 信家
一〇〇〇〇 妻 佐竹 エス
八〇〇〇 母 加藤きくや
七〇〇〇 妻 鈴木つな子
五〇〇〇 母 吉田 いそ
二〇〇〇 妻 柏木 春江
一〇〇〇 母 助川与富子

一〇〇〇〇 兄 田村賢治郎
一〇〇〇〇 妻 渋谷セキノ
一〇〇〇〇 兄 浮田 信家
一〇〇〇〇 妻 佐竹 エス
八〇〇〇 母 加藤きくや
七〇〇〇 妻 鈴木つな子
五〇〇〇 母 吉田 いそ
二〇〇〇 妻 柏木 春江
一〇〇〇 母 助川与富子

一〇〇〇〇 兄 池田 精治
四〇〇〇 弟 藤木 ハナ
一〇〇〇〇 妻 黒川 一
一〇〇〇〇 甥 望月とよ子
五〇〇〇 妻 志田 かね
一〇〇〇〇 母 神田八千代

一〇〇〇〇 妻 新田富美子
一〇〇〇〇 父 加藤 源治
一〇〇〇〇 妻 石幡サツキ
二〇〇〇〇 妻 吉田 ハル
四〇〇〇〇 妻 竹林 高男

一〇〇〇〇 兄 新後閑 彰
二〇〇〇〇 父 滝沢謙次郎
一〇〇〇〇 妹 福田 とよ
一〇〇〇〇 弟 土岐 達雄

一〇〇〇〇 兄 浮田 信家
一〇〇〇〇 妻 佐竹 エス
八〇〇〇 母 加藤きくや
七〇〇〇 妻 鈴木つな子
五〇〇〇 母 吉田 いそ
二〇〇〇 妻 柏木 春江
一〇〇〇 母 助川与富子

一〇〇〇〇 兄 田村賢治郎
一〇〇〇〇 妻 渋谷セキノ
一〇〇〇〇 兄 浮田 信家
一〇〇〇〇 妻 佐竹 エス
八〇〇〇 母 加藤きくや
七〇〇〇 妻 鈴木つな子
五〇〇〇 母 吉田 いそ
二〇〇〇 妻 柏木 春江
一〇〇〇 母 助川与富子

一〇〇〇〇 兄 池田 精治
四〇〇〇 弟 藤木 ハナ
一〇〇〇〇 妻 黒川 一
一〇〇〇〇 甥 望月とよ子
五〇〇〇 妻 志田 かね
一〇〇〇〇 母 神田八千代

一〇〇〇〇 妻 新田富美子
一〇〇〇〇 父 加藤 源治
一〇〇〇〇 妻 石幡サツキ
二〇〇〇〇 妻 吉田 ハル
四〇〇〇〇 妻 竹林 高男

一〇〇〇〇 兄 新後閑 彰
二〇〇〇〇 父 滝沢謙次郎
一〇〇〇〇 妹 福田 とよ
一〇〇〇〇 弟 土岐 達雄

一〇〇〇〇 兄 浮田 信家
一〇〇〇〇 妻 佐竹 エス
八〇〇〇 母 加藤きくや
七〇〇〇 妻 鈴木つな子
五〇〇〇 母 吉田 いそ
二〇〇〇 妻 柏木 春江
一〇〇〇 母 助川与富子

一〇〇〇〇 兄 田村賢治郎
一〇〇〇〇 妻 渋谷セキノ
一〇〇〇〇 兄 浮田 信家
一〇〇〇〇 妻 佐竹 エス
八〇〇〇 母 加藤きくや
七〇〇〇 妻 鈴木つな子
五〇〇〇 母 吉田 いそ
二〇〇〇 妻 柏木 春江
一〇〇〇 母 助川与富子

一〇〇〇〇 兄 池田 精治
四〇〇〇 弟 藤木 ハナ
一〇〇〇〇 妻 黒川 一
一〇〇〇〇 甥 望月とよ子
五〇〇〇 妻 志田 かね
一〇〇〇〇 母 神田八千代

一〇〇〇〇 妻 新田富美子
一〇〇〇〇 父 加藤 源治
一〇〇〇〇 妻 石幡サツキ
二〇〇〇〇 妻 吉田 ハル
四〇〇〇〇 妻 竹林 高男

一〇〇〇〇 兄 新後閑 彰
二〇〇〇〇 父 滝沢謙次郎
一〇〇〇〇 妹 福田 とよ
一〇〇〇〇 弟 土岐 達雄

一〇〇〇〇 兄 浮田 信家
一〇〇〇〇 妻 佐竹 エス
八〇〇〇 母 加藤きくや
七〇〇〇 妻 鈴木つな子
五〇〇〇 母 吉田 いそ
二〇〇〇 妻 柏木 春江
一〇〇〇 母 助川与富子

一〇〇〇〇 兄 田村賢治郎
一〇〇〇〇 妻 渋谷セキノ
一〇〇〇〇 兄 浮田 信家
一〇〇〇〇 妻 佐竹 エス
八〇〇〇 母 加藤きくや
七〇〇〇 妻 鈴木つな子
五〇〇〇 母 吉田 いそ
二〇〇〇 妻 柏木 春江
一〇〇〇 母 助川与富子

事務局だより

◎現地慰霊のお世話いたします。

本会の主催による現地慰霊には、

昭和五〇年 クエゼリン島 36名

昭和五二年 ギルバート諸島 25名

昭和五三年 クエゼリン島 35名

が参加いたしました。

各回とも、もつと多くの希望者があ

りました。勤務や健康の都合で急

とりやめた方が沢山をり、次は何時か

とのお問い合わせがきております。

◎主催の慰霊はここ暫く行わないで

希望者には斡旋、お世話をするこ

になりましたので次の条件で差支えない

方は本部にお問い合わせください。

一班五、六人以上になれば好都合か

と思えます。

一、時期 七月下旬～八月上旬

二、日数 約七日間

三、健康 良好な者。高齢者は付添者

が必要です。

四、費用 三十万円前後。但し、添乗

員を要する時はその分が嵩

みます。

五、順路の一例

1、クエゼリン班

東京―グワム―マジュロークエゼ

リン―サイパン―東京

2、ギルバート班

東京―グワム―ナウル―タラワ―

マキン―ナウル―サイパン―東京

◎両班とも、帰路グワム又はサイ
パンで一泊し、戦跡見学がで
きます。

◎マジュロのお客様訪日の際は、接遇

について大勢の会員に御協力を頂き、

おかげさまで御一行は満足してお帰

になりました。現地からの連絡が充分

でなく、従って本会の対応も計画が狂

いがちで、折角御協力の申出あった会

員に余裕のある連絡ができなかったの

は残念でした。

◎「戦史叢書」が完成しました。

「環礁」17号(48・1・1発行)で、

防衛庁戦史室著の「戦史叢書」につ

てお知らせしましたが、この十二月を

以て全巻一〇三冊が完成し配本されま

した。今までも「環礁」編集上最も正

確な資料として引用してきましたが、

今後会員皆様のお尋ねに際し、有効に

役立つことと信じます。尚、本会が利

用しているのは、浮田会長個人が購入

したものです。

◎戦死の場所などお知りにならない方

は、いませんか。

戦死公報に、戦死の場所を単に「中

部太平洋」とか「南方海面」とか書い

てあって、具体的な場所も、所属部隊

も、ましてや戦闘状況などの全くわか

らない方が多いと思えます。戦史叢書

完成を機に、そのような方には、でき

る限り調査してお知らせしております

謹賀新年

昭和五十五年元旦

◎本会役員及び篤志会員

| | | | |
|------|-------|---------|---------|
| 名譽会長 | 朝香鳩彦 | 篤志会員 | 石垣清 |
| 相談役 | 浮田信家 | 板垣井 | 大野克 |
| 副会長 | 佐藤宗丞 | 嘉村栄 | 木下浦 |
| 常任幹事 | 岡野智洋 | ケイス・エス・ | ウイリアムス・ |
| 同 | 井上満雄 | ジョン・ウィリ | ス |
| 同 | 木下満雄 | 同 | 同 |
| 同 | 宇田川 | 同 | 同 |
| 同 | 大高吉郎 | 同 | 同 |
| 同 | 岡山正 | 同 | 同 |
| 同 | 片山久 | 同 | 同 |
| 同 | 木村計 | 同 | 同 |
| 同 | 国松ふみ江 | 同 | 同 |
| 同 | 小泉文江 | 同 | 同 |
| 同 | 佐竹エス | 同 | 同 |
| 同 | 柴崎晃 | 同 | 同 |
| 同 | 高橋功 | 同 | 同 |
| 同 | 高林夫 | 同 | 同 |
| 同 | 土岐達夫 | 同 | 同 |
| 同 | 橋口昭雄 | 同 | 同 |
| 同 | 山浦信平 | 同 | 同 |
| 同 | 秋山信子 | 同 | 同 |
| 同 | 末廣正男 | 同 | 同 |

のでお問い合わせ下さい。お問い合わせに
は、調査の効率上次の項目中わかるも
のは全部お書き下さい。
「氏名、生年月日、本籍地、陸海軍
の別、部隊名、階級、戦死場所、軍事
郵便の発信番号その他」

本 部
郵便番号一五四
東京都世田谷区野沢
三丁目十一番三号
マーシャル方面遺族会
電話(東京)三三〇四三〇番